

# ブリティッシュネスから イングリッシュネスへ

—— イングランドの田舎というホーム 1870-1914\*

金子 幸 男

## 序 論

2020年1月31日、歴史的なEU離脱が達成され、UK全体の行く末だけではなく、投票行動に差が出たイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの先行きも気になるところだが、ブリテンと4つの地域の関係の難しさは今に始まったことではない。19世紀はイギリス帝国全盛期で、ウェールズ、スコットランド、アイルランドも帝国の一員として貢献していたので、イングランドはあまり目立たず、ブリテンが前景化していた。ところが20世紀になると、帝国の衰退と終焉、脱工業化、EU加盟、各ネイションへの権限移譲、スコットランド・ナショナリズムの復活、増加する移民など連合王国を解体する方向の力が働く。すると各ネイションについての意識が強まり、帝国の陰に隠れていたイングリッシュネス<sup>1)</sup>を再定義する必要が生じてきた(ルヴィオンピーゲイ 3)。

本論文では、まずナショナル・アイデンティティの議論に必要な概念や理論について確認した後で、イングリッシュネスにおけるホームの重要性、ブリティッシュネスとイングリッシュネスの違い、19世紀のブリティッシュネスから世紀末のイングリッシュネスの登場へと向かう流れをアングロ・サクソン主義と絡めてみてゆく。さらにイングリッシュネスがイングランドの田舎に、特に南部イングランドの田舎にあることを見、その地域のコテッジ労働者を描いた作家ジョージ・スタートと、農業労働者を描いた画家ラ・サングとジョージ・クラウゼンの絵画を見ていく。

---

\* 本論文は2020年度京大英文学会年次大会(11月14日)における発表をもとに加筆修正したものである。

1) イングリッシュネスについては、コルズの2冊の著書、共編著が包括的で詳しい。風景の観点からはホスキンスが、国民性という観点からはラングフォードとマンドラー、絵画と建築という観点からはペヴスナー、ポストコロニアルな観点からはバーカムを参照。

### 〈基本的な概念とナショナリズム論〉

まずは基本的な概念の確認をしたい。ネイションには、エスニックな意味合いが濃い「民族」と、それとは切り離された「国民」の2つの意味がある（塩川 第1章）。ステイト（国家）は、秩序維持を専門的、集中的に行う制度、法律、国制のことであり、警察や裁判所などがこれに入る（ゲルナー 3-5）。

ナショナリズム論としては3人を紹介する。アーネスト・ゲルナーはナショナリズムを近代産業社会に固有の現象とみる。それは流動的な分業社会であるから、読み書き能力と技術の知を持った人間が必要で、近代国家は公教育によって、そのような国民を育成するという。ベネディクト・アンダーソンによれば、近代の君主制国家による宗教改革と王権強化のための俗語の拡大に連動して近代の出版資本主義が起こる。人々は新聞、出版物などを通して、均質な空虚な時間の中で同時に起こっている様々な出来事を知り、そのような出来事が集積すると、イメージとして心に描かれた「想像の共同体」、つまり国民が誕生すると言う。

三人目はA・D・スミスである。彼は次の5つの要素からナショナル・アイデンティティが構成されるという。

1. An historic territory, or homeland
2. Common myths and historical memories
3. A common, mass public culture
4. Common legal rights and duties for all members
5. A common economy with territorial mobility for members

A・D・スミスはエスニックな核のようなもの（エトニー）が発展してネイションになると言うが、そのナショナル・アイデンティティの要素として、上記5つの要素、① 歴史的領土、ホームランド（故国、故郷、ホーム） ② 共通の神話と歴史的記憶 ③ 共通の大衆文化 ④ 共通の法的権利・義務 ⑤ 共通の経済 をあげている。イングリッシュネスもこの5要素を含む。筆者はスミスの考え方が分かりやすく使い勝手がよいので、これを用いたい。特にイングリッシュネスとしてのホームという考えを本論文では使う。

### 〈ホームの重要性〉

ホームがイングリッシュネスを考えるとときに重要なことは、歴史的に家族が18世紀末から19世紀半ばにかけていかに興隆してきたかを、多面的に詳細に追ったダヴィドフとホルの名著『家族の命運 イングランド中産階級の男と女 1780-1850』から理解できる。この著書によれば、18世紀末から19世紀半ばにかけて中流階級は福音主義の影響下、家庭の神聖さや道徳性がよきキリスト教徒の生活の基礎であると考えた。

男女の差異についての教えから固有の活動領域が定まり、男は外で市民、企業家として働き、女は家庭で妻、母として家事を行いながら必要なら家族企業の担い手ともなる。道徳的秩序は、誰がイングリッシュな国民としてふさわしいかを定義する (50)。19世紀後半においてもホームは重要なナショナル・アイデンティティの要素であり続けた。

次に保守の政治家エドモンド・バークがホームという概念を用いて、イングランド国家について論じている様子を見てみよう。フランス革命を批判する書『フランス革命についての省察』をものしたバークは、イングランド国王による国家の継承を否定しようとするフランス革命支持派に対して、「家庭」の比喩を用いながら、それをイングランドが受け継ぐべき伝統の最たるものとして支持している。

In this choice of **inheritance** we have given to our frame of polity **the image of a relation in blood**; binding up the constitution of our country with **our dearest domestic ties**; adopting our fundamental laws into the bosom of **our family affections**; keeping inseparable, and cherishing with **the warmth of all their combined and mutually reflected charities**, our state, our hearts, our sepulchers, and our altars. (34; 強調は筆者)

選挙ではなく、相続 (inherit) という形を選んだことにより、「我々の政治の枠組み」(our frame of polity) つまりイングランドに、「血のつながり」(a relation in blood) というイメージを与え、「政体」(constitution of our country) を愛おしい「家族の絆」(domestic ties) で縛り、基本的な法を「家族の愛情の胸元」(the bosom of our family affections) へと受け入れる。そして、「国家」(state), 「囲炉裏」(hearths), 「墓」(sepulchers), 「祭壇」(altars) を分離不可能なものとして愛情でくるむという考え方には、ホームのイメージがはっきりと刻印されている。興味深いのは私的領域である家庭、血のつながった家庭の比喩で語られるのは、本来は公的な領域として政治経済の言葉で語られるはずの国家である。つまりバークは、理性よりも情感がこの国家を支えるという国家観を抱いていたのだ。バークよりも半世紀後になって、ラスキンもエッセイ、「Of Queen's Garden」で19世紀イングランド中産階級の典型的なホーム観を述べている。またさらに半世紀後になって、サー・アーサー・クイラーカーチもホームが愛国主義の源泉であると言う (288)<sup>2)</sup>。

2) 大石和欣も『家のイングランド』においてホームの重要性を指摘し、「イングリッシュな家」という理想的な空間を、19世紀から20世紀半ばまでのイングランド建築の中に追っている。

## 〈イングリッシュネスとブリティッシュネス〉

イングリッシュネスとブリティッシュネスとはどのようなものなのか。ラファエル・サミュエルが『愛国心』につけた序文にある定義をまとめると次のようになる。「イングリッシュネス」は心地よい響きと古風なものの魅力を持ち、人々の情感に訴える家庭的な言葉である。国家よりも民衆を、イングランドの魂である田舎とのつながりから鄙びたイメージを喚起する。「ブリティッシュネス」は居心地の悪い言葉で、政治的なアイデンティティを持つ。文学よりも外交や軍事との連想が強く、国内よりも帝国を喚起する言葉である。市民としてネイションをみるため共通文化を前提とせず、新参者やよそ者に対して開かれている (Preface to *Patriotism*, pp. xii-xiii)。この二つの言葉の質感の違いを心得ておくと、ブリティッシュネスからイングリッシュネスへの移行の理解が深まるであろう。

## 1. ブリティッシュネスからイングリッシュネスへ

〈19世紀のブリテン国内<sup>3)</sup>〉

19世紀前半のブリテンは統合と分断の時代と言えよう。人口増加、都市化、工業化、さらには運河、鉄道など交通の発達は、統合を促進した。また、功利主義と人道主義を基礎にして、中央政府による地方統制 (工場法、公衆衛生法、新救貧法など)、社会問題に対する統合的な法体系の整備 (選挙法改正や、審査律廃止、カトリック解放令) がなされた。分断の例としては、ラッドライト運動、チャーチスト運動等があげられよう。スコットランドやウェールズでナショナリズムの動きはなかったが、アイルランドは合同後やや問題含みであった。

19世紀後半、スコットランドは独自の宗教、法律、教育制度をもつ市民社会を形成していたが合同を支持し、連合王国の中に統合されていた。その枠内で、世紀末にゲーリック文化復興、たとえばタータン (伝統的スコットランド文化の表象) への関心が見られた。ウェールズは経済的にブリテンや帝国と統合されていた。カトリックのアイルランドでは80年代の自治要求、80年代~90年代のゲーリック復興 (アイルランド語復興や民間伝承への関心、ゲーリック・スポーツ普及) にナショナリズムが見られた。

〈ブリティッシュネスとイギリス帝国<sup>4)</sup>／帝国主義イデオロギー〉

バックス・ブリタニカ謳歌の時代は、ブリティッシュネスと帝国という枠で考えることができる。イングリッシュネスはブリティッシュネスの中で目立たなかったから

3) ここから19世紀末イングリッシュネスが登場するまでの記述は、デイヴィッド・パウエルを参考にした。

4) 19世紀イギリス帝国史については井野瀬久美恵、フィリップ・レヴァインが優れている。

だ。

19世紀が進むにつれ、帝国へのイデオロギー的な支持が増し、帝国主義がブリティッシュネスを強めた。帝国は道德的な善（奴隷制廃止 1833年、キリスト教布教の使命）をなし、西欧化も進め、たとえばインドでは西洋型教育と英語使用によりリベラル思想を植えた<sup>5)</sup>。インド、アフリカの帝国主義イデオロギーは慈愛の面と人種的・文化的優越主義という両面を備えていた。他方、白人入植地（ドミニオン）では、インド、アフリカとは異なるイデオロギー的な正当化がなされた。チャールズ・デイルケとサー・ジョン・シーラーはそれぞれ『大ブリテン』（1868）と『イングランドの拡大』（1883）において、ドミニオンはブリテンが遠方に拡大されたものであり、血筋、言語、宗教、法律、文化の共有により、母国とは有機的な関係を保っているという。

君主制と複合的なネイションであるブリテン国家、およびイギリス帝国との関係も重要である。19世紀末から20世紀末まで、王室がブリティッシュ・ナショナル・アイデンティティの中心であった<sup>6)</sup>。1876年インド女帝となったヴィクトリア女王はイギリス帝国と密接に結びつき、ドミニオンやコロニーの忠誠を維持する装置とみられていた。君主制と帝国主義は、ブリティッシュネスを作り出す機能を持っていた。1870年代以降メディアの発達により伝統の創造が可能となり、即位記念祭や戴冠式は君主をネイションの中心に据えた。夫アルバートとの間に築いた模範的な家庭はヴィクトリア女王をネイションと帝国の母とした<sup>7)</sup>。女王をナショナルな家庭の長として表象することは、階級的な分断、地理的な分断を克服する手助けともなった。君主と帝国主義は4つのネイションとブリテンのアイデンティティを融和する機会を提供したのだ。

#### 〈ブリテンの国民生活とイギリス帝国〉

ヴィクトリア朝時代、帝国は国民生活にも深く浸透しブリティッシュ・アイデンティティを強めた。帝国意識はブリテンの輸出入品に表現されている。輸出品は、物品、人間、言語、宗教、法律、統治形式。植民地からの輸入品は奢侈品、芸術作品、茶、砂糖、タバコなど、日常生活に影響を与えた。また「帝国」という語が広告や建物、劇場、映画館の名前として使われた。帝国意識はクリケットなど、スポーツの共

5) トマス・バビントン・マコーレーは、インドの臣民を趣味、意見、道徳、知性においてイングリッシュに育てることを提案している。

6) 19世紀後半、アイルランドのナショナリズムだけはブリテンの国制に対する脅威だった。政治的分裂が回避されたのは、ポール・ウォードによれば、1870年代以降、王室や女王の役割がブリテン国家、ひいてはイギリス帝国の多様性と統一を祝う気分を醸成するのに大きな貢献をしたからだということが言えよう（ウォード 第1章）。

7) ヴィクトリア女王と家庭のイデオロギーの関係については川本／松村を参照。

有によっても高まった。

帝国はフィクションとノンフィクションにおける背景でもあった。愛国心あふれる冒険物語（G. A. ヘンティ、ヘンリー・ライダー・ハガードなど）や、雑誌『ボーイズ・オウン・ペーパー』、ウィルキー・コリンズやコナン・ドイルの作品をあげることができる。探検旅行記や新聞などは帝国意識を広めた。ヴィクトリア朝末、帝国感情はブリティッシュネスを定義づける性質だった。

〈イングリッシュネスの登場、イギリス帝国の衰退<sup>8)</sup>〉

パックス・ブリタニカを謳歌していた時代はイングリッシュなものにはブリティッシュネスの陰に隠れて目立たなかった。しかし、1870年代、帝国主義による植民地の拡大とともに国際情勢が変化し、ナショナリズムの台頭もあって、イングリッシュネスが明確に立ち現れてきた。

このようにイングリッシュネスが目立つようになった背景には、帝国が自信を喪失したということがある。パックス・ブリタニカも終わりを迎え、ナショナリズムと人種差別主義が顕著になり、イギリス帝国民は、ハルツームにおけるゴードン将軍の死や南アフリカ戦争により、その伝道師的な役割を疑問視、ブリティッシュ・アイデンティティの根幹にあったプロテスタントイズムも揺らいだ。J. A. ホブソンは『帝国主義』（1901）で、帝国主義批判を展開する。帝国に対する自信喪失と歩調を合わせるように、デカダンス、退化、ヨーロッパ文化の危機が、世紀末ヨーロッパの芸術家や知識人の間で囁かれていた。イングランドと大陸において、19世紀後半、ホブズボームがいうナショナリズムが大衆的な力を獲得し、エスニックで文化的なものとして、ネイションの魂は、言語、宗教、文化、習俗、民間伝承、その歴史と伝統の中にあるとされた。アイルランド、スコットランド、ウェールズのナショナリズムはケルト文化を再発見し、1701年以来打ち立てられたブリティッシュ・アイデンティティの土台を揺るがしかねないものであった。

〈イングリッシュネスの発見（ホイッグ歴史観とアングロ・サクソン主義）〉

イングリッシュネスとしての共通の神話や歴史的記憶は、自由に生まれついたすべてのイングランド人（free-born Englishmen）という歴史的な神話として17世紀末までに定着する。19世紀にはこの神話は歴史化され、イングランドの歴史はマグナ・カルタからローマとの断絶、内戦、名誉革命を経て選挙法改正まで、自由の進歩のドラマであるというホイッグ史観となる。この史観の基礎に据えられたのがアングロ・サクソン主義である。

19世紀末のアングロ・サクソン主義は、国家よりも民族（イングランド民族の精神）、

8) ここからのイングリッシュネスの記述はクリチャン・クマールを参考にした。

言語、習慣、文化を重視する。拡張主義を取り帝国主義とも結びつく<sup>9)</sup>。アングロ・サクソン主義がイングリッシュネス意識の中心を占め、イングランド人だけが、アングロ・サクソンの自由と男性らしさ（指導力、勇気、正義感、名誉心）を受け継いだのであり、ケルト人は、狂信的、手に負えない、怠惰な夢見る人間であると言う。イングランド女性の役割は民族（race）の保存、維持、向上で、健康な子供を産み育て、イングランド人の精神的・道徳的価値を守ることだった。アングロ・サクソン主義は民衆（フォーク）としてのイングランド人を入れる器だった。

そのフォークは19世紀末ヨーロッパで発見され、その伝承と言語、歌と踊り、習慣と物語が集められ記録された。イングリッシュ・フォーク・ソングを集めたセル・シャープは、イングリッシュネスを表象する‘Greensleaves’を作曲したラルフ・ヴォーン・ウィリアムズやグスタフ・ホルスト、エドワード・エルガー（『威風堂々』）とともに、世紀転換期のイングリッシュな音楽復興に関わった。

#### 〈イングランドの田舎というホーム〉

田舎への愛着心もイングリッシュネスの特徴である。この田舎は特にサウス・カントリーとよばれる、かつてはアングロ・サクソンの王国が置かれていた場所である。小説家トマス・ハーディが舞台にした架空の地ウエセックスもこの地域にあり、アングロ・サクソン主義とのつながりは明らかだ。この地にイングランドの精神を見た作家として、W.H.ハドソン、リチャード・ジェフリーズ、エドワード・トマス、ジョージ・スタートらがいる。

田舎というホームへと向かう19世紀後半から20世紀初頭の文化的動きについては、マーティン・J・ウィーナーの『英国文化と産業精神の衰退 1850-1980』(*English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850-1980*) (1981, 2004) が必読の文化史である。新版につけた彼の序文によれば、19世紀末から20世紀初頭にかけて、産業革命の破壊的な力に対する文化的な反発が中流階級の中から起こる。19世紀半ばまでにはナショナル・アイデンティティは“industrialism, technology, capitalism, and city life”にあるのではなく、“values rooted in slow-changing ‘country ways of life’”に関わるようになった。この価値観はパブリック・スクールやオクスブリッジの教育により、また貴族の価値観や生活様式を模倣することにより植えこまれたものである。結果的に技術職は官吏や専門職よりも劣ったものとなった (xv-xvi)<sup>10)</sup>。この本の4章はイン

9) 世界中に広がったアングロサクソンの文化（言語、文学、法律、自由、正義、秩序、道徳、プロテスタントの国教会）をイングリッシュネスと見なす考え方については、ロバート・ヤングを参照。

10) このウィーナーの文化批評を、W・D・ルービンスタインは批判し、イギリスは商業・金融・サービスに基礎をおく経済だったのであり、産業国家、製造業国家だったことはなく、反産的文化的文化のためにイギリスが衰退したということはないと言う (25)。

グリッシュネスが、秩序と伝統の南部への愛着、ナショナルな過去への関心、田舎の理想化と反都市主義、郊外化、国民的遺産という考え方などにあるとする。特に、小説家トマス・ハーディがナショナルな過去、失われつつある民衆文化へのノスタルジアを描く中で、近代の不安を打ち消すべく登場したことは特筆してよい<sup>11)</sup>。

## 2. ジョージ・スタートとベッツワースの世界

ここでは特に、南部イングランドの農業労働者を描いた作家、農業ジャーナリストであったジョージ・スタート（別名ボーン、1863-1927）について眺めてみたい<sup>12)</sup>。『オクスフォード国民伝記辞典』によれば、サリー州、ファーナムで車大工の家に生まれた。ウィリアム・コベットの同郷である。ファーナムのグラマースクールに通い、教師となったが車大工の家業を若くして継ぐ。作家になる志は捨てず、家業に従事しながら小説、エッセイ、回想録などを発表していった。ラスキンの影響を受け、アーノルド・ベネットとも親交があった。1891年にボーン村に移った。ベッツワースの三部作（1901, 1907, 1913）で村の庭師の人生を回想し、『村の変化』（1912）では囲い込みが田舎の村にもたらした変化を客観的に分析、終生、民衆（folk）に関心を持ち個人よりは民衆の文化に関心を持った。病気がちで1916年卒中に襲われ麻痺が残り持病の喘息に苦しむ中、1920年廃業。コテッジで未婚の妹二人に介護してもらう。代表作『車大工の作業場』（1923）を出版。死後出版のジャーナルも有名で民衆の考えを十二分に表現している。生涯独身だった。

これからみていくのは、ベッツワース家の物語である。スタートはベッツワース家のフレデリックとその妻ルーシーを中心にした3部作のメモワールを書いている。『ベッツワース・ブック——サリー州農民との会話』（1901）、『サリー州労働者の回想録——フレデリック・ベッツワース晩年の記録』（1907）、『ルーシー・ベッツワース』（1913）という3作品である。フレデリックは語り手の「私」以上に庭が好きな「私」の庭師であるが、農業労働者としてさまざまな仕事ができる優秀な労働者でもある。スタートが『村の変化』で言うように、農業労働者は人が簡単にはまねのできないスキルと勘を身につけた熟練労働者である。老フレデリックは「私」に向かって自分の

11) ハーディの作品にはイングリッシュなコテッジとカントリーハウスが登場するが、紙面の制約上、別の機会に論ずることとする。テスの祖先のかつてのお屋敷に飾られた二人の貴婦人の邪悪な肖像画が祖先の血筋が断絶するのも当然という印象を与え、ハーディにおけるカントリーハウスは衰退するか背景に退いているとだけ言っておこう。

12) F・R・リーヴィスはスタートの描く村に、今は失われてしまった生きた文化、有機的社会を見出し高く評価している。デヴィッド・ジャベイによれば、スタートの鋭い観察力は農民の厳しい生活を直視しているという。ジョン・フレイザーは農業労働者ベッツワースの仕事に対するプロフェッショナルな意識を指摘している（146）。ポウジアスは、スタートが初めて田舎の労働者の精神性に光をあてたという（284）。



人生についてエピソード形式で語り、「私」はときおりコメントをさしはさむ<sup>13)</sup>。「私」は作者のスタート本人と考えてよいだろう。

さて、このフレデリックは「私」にとってどういう存在であったか。『ベッツワース・ブック』でこう言っている。彼は若い頃は放浪癖があった。カーライル、ニューカッスル、リバプール他多くの地に行き、いろいろな仕事をし、壮年になるとどんな仕事もこなせる人間となっていた。サセックスまで収穫の手伝いに行く心弾む経験、収穫は素晴らしい仲間、好天気、イングランドの森、牧草地、小麦畑という空間の広がりの中を旅する解放感を意味した。眼の前にいるのは風変わりだが話し好きで滑稽な人物だった。しかし、その外見の下に些細な贈り物でも喜ぶ、苦しみに満ちた貧困や不幸、病気の人生が見え隠れする。加えて彼の禁欲主義、忍耐力、手際よさに「私」は賞賛を覚えた。いつしか二人の間には雇用主・雇人の金銭関係ではなく友愛 (fellowship) が生まれていた。フレデリックと同じように道路建設、レンガ焼き、荷馬車引き、井戸掃除、コテッジの普請をする重宝な農業労働者は多く、“they are carrying on the work begun by their ancestors a thousand years ago, making England’s fields productive and her towns habitable.” (8)と表現されている。このようなベッツワースは民衆 (フォーク) の一人である。『ベッツワース・ブック』の序文の言葉を聞いてみよう。

And so, when I [narrator] hearken to Bettesworth, I feel that it is not to an exceptional man, and still less to an oddity that I am listening; but that in his quiet voice I am privileged to hear the natural, fluent, unconscious talk, as it goes on over the face of the country, of the English Race, rugged, unresting, irresistible. The Race—not the aggregate of individuals, but the Stirp or Stock that puts forth Bettesworth by the million, and rejoices in its English soil and loves hard knocks of adventure and necessity everywhere. (*The Bettesworth Book*, 8-9; 強調は筆者)

ここでは、「私」はベッツワースの話を書くときに特別な奇妙な男の話を聞いているのではなく、イングランド民族 (English Race)、武骨で、活動的な、力強い民族の一人の話を聞いているのだ。これはアングロサクソン民族のことであるが、個人の集合体ではなくベッツワースを大量に生み出す血統であり、イングランドの大地に歓喜し、冒険と困窮を愛するのだ。“the native orderliness, the self-reliance, the indomitable vigour of our English breed” (9) こそが、ベッツワースの話の核にあった。フリーマンの言うところによれば、“timelessness and permanence” を持った存在であり、“the bearer of Englishness” (172)、民衆の伝統の担い手である (172)。

13) 農村文学の魅力がプロットではなく、自然の循環に合わせたエピソードにあることは富山参照。

次に二作目の回想録『サリー州労働者の回想録——フレデリック・ベッツワース晩年の記録』（1907年）の中から、現実的な農業労働者の姿を拾ってみよう。

最初に育児放棄した夫婦の話。ベッツワースがかつて住んでいた小川の傍らのコテージに新しいテナントが入って来た。しかし隣人夫婦は夜逃げして子供たちは置いてけぼりにされた。父親はウスターという名前で、元兵士の年金生活者。母親のほうは、亭主がいなくて男を引き込んで、駆け落ちする。日曜に戻った夫のほうは、妻が逃げたことを知り、年金書類などをもって出ていく。5歳と6歳の二人の子供が残された。二人とも両親が戻らなければ救貧院行きだ（149-50）。

次の話は老妻ルーシー・ベッツワースに関わる。ルーシーは、結婚前から苦勞の人生を送ってきた、醜い汚らしい外見をした、しかしスキルの高い農業労働者として描かれている<sup>14)</sup>。1897年、てんかんの発作で倒れて手首を骨折、手が動かなくなる。認知機能も衰え始める。1903年1月、隣の盆地のカントリーハウスを購入した裕福な住人が友人に屋敷の一部を貸していた。敷地内の複数あるコテージの一つが空いた。住んでいたコテージを出ることに決めていたベッツワースは空いたコテージに応募し「私」の推薦状もあって入居できた。しかしベッツワース夫人の姿を見たお屋敷の所有者やその友人たちは即時の立ち退きを要求した。夫人があまりにも薄汚く垢だらけで、中世の貧困の恐ろしい姿そのものであり、てんかんが原因の認知低下で人の話が理解できなかったからだ。夫フレッド自身も目が不自由で妻ルーシーをレディに仕立て上げ、さらにコテージ内を清潔にしておくことは不可能だった。結局、新居のコテージからは退去し、「私」が探し出したコテージにベッツワース夫妻は引っ越した。

村人たちからは疎まれていたルーシーの死は『サリー州労働者の回想録——フレデリック・ベッツワース晩年の記録』のほうに記されている。夫ベッツワースは保険までかけてまっとうな葬式をあげる。彼はベッツワース夫人を亡くして傷心の時に、コテージでの一人暮らしをよしとする。

Shutting his mouth doggedly, Bettsworth went back to his cottage, to live alone there with his cat. There had been some talk of his going into lodgings; but after all, this was still his home. Should he once give it up, he reasoned, and dispose of his furniture, it would be impossible ever again to form a home of his own, however much he might desire to do so. To live with neighbours might be very well; yet how if he and they should disagree? He would have burnt his boats; he would be unable to resume his independence. Better were it, then, to keep while he still had it a place where he was his own master, and take the risk of being lonely. (*Surrey Labourer* 179)

14) ルーシーの前半生のについては、『ルーシー・ベッツワース』（1913）の第1章が詳しい。

彼はルーシーが可愛がっていた猫と二人だけで住むことを決意する。なじみの家具も処分した後では他の場所にホームは作れない。下宿して隣人とともに暮らし意見の不一致が生じれば、彼の独立を保てなくなる。結局このコテッジが彼のホームなのであり、自分が主人のままにいられる場所を維持し、孤独に耐えるほうがホームを失うよりはいい。イングリッシュネスを体現したようなベッツワース老人は、コテッジ・ホームというイングリッシュネスのアイコンの中に安息の場所を見つけているのだ。

この老ベッツワースが最後を迎える場面では、彼は「私」との最後の会話で、庭に植えたエシャロットや豆の収穫が終わったことについて話をする。自分の労働に対する関心と誇りを最後まで示しているわけだ。

### 3. ラ・サングとジョージ・クラウゼンの世界

イングリッシュネスを担う農民の表象という点で、ベッツワースの世界に近いのは、二人の画家ヘンリー・ラ・サング (Henry LaThangue) とサー・ジョージ・クラウゼン (Sir George Clausen) の絵画世界<sup>15)</sup>である。

図1はラ・サング作で、『最後の畝溝』(1895)である。工作中的の農業労働者が威厳のある死を迎えた様子が、彼の白い馬のやさしく気遣う眼差しによって捉えられている。畑の畝に引かれた平行な直線の幅が手前にくるほど広がりながら曲線を描くことによって鑑賞者の視線がガクッと肩を落とした老いた労働者に誘導され、劇的な雰囲気醸し出している。幾何学模様はまた彼の仕事の几帳面さを示している。90年代のラ・サングは死のテーマにこだわっていた。この死の場面は、ベッツワースが臨終間近の場面で、語り手と庭に植えた植物、穀物の成長具合を話し合う、最後まで仕事にこだわった場面に似ている。

図2は、クラウゼンの『老女』(1887)である。肖像画はもともと中産階級、上流階級からの依頼により描く高級なジャンルであったが、田舎の労働者、女性労働者さえ

15) ラ・サングはイギリスの画家。ロイヤル・アカデミー・スクールに通う。奨学金をもらって1879年渡仏、パリのエコール・ド・ボ・ザールで勉強。サロンの田園を描く自然主義の画家やバステイアン＝ルパージュの影響を受けた。『最後の畝溝』をはじめとする社会リアリズムの絵画を生産し続けた。(McConkey)

サー・ジョージ・クラウゼンはイギリスの画家。デンマーク人のインテリア装飾業者とスコットランド系女性の間の息子として生まれた。ロンドンのサウスケンジントン芸術学校、その後アントワープ・アカデミーで勉強。1876年頃、パリに行き、ジュール・バステイアン＝ルパージュの自然主義と1880年に出会う。絵画『女羊飼い』(1885)はバステイアン＝ルパージュの田園自然主義の影響を受けたものである。91年にはロイヤル・アカデミーに戻った。『鳥払い 3月』(1891)はハーディの『日陰者ジュード』を反響している。1904年には2年間アカデミーの教授をし、26年ナイトに叙せられた。(McConkey)

ラ・サングとクラウゼンについてはエイドリアン・ジェンキンスが、フランス自然主義の流れの中で追っていて興味深い。



図 1 Henry La Thangue, *The Last Furrow* (1895)



図 2 George Clausen, *An Old Woman* (1887)



図 3 George Clausen, *Head of a Peasant Woman* (1882)



図 4 George Clausen, *The Shepherdess* (1885)

も描くようになった。静穏、誠実、正直さが、緑を背景にして彼女の年取ったしわだらけの顔に読み取れる。枝をつかんでいる右手は彼女と自然とが一体であり、自然から生まれ、自然に帰っていくことを示している。

図3もクラウゼンの『農民女性の頭』(1882)である。この老女の肖像画は過酷な労働生活を示唆し、その証しとして、深いしわと日焼けした顔、他の部分よりも黒い頬があげられる。彼女の眼差し、真一文字の唇、杖を握った両手、これらは決断力と思索という男性性の徴である。この老女に女性性は感じられないが、元気で仕事に従事していたルーシー・ベッツワースを思い出すことは容易であろう。

図4もクラウゼン作の『女羊飼い』(1885)である。若い女羊飼いが、片手に少し斜めに長い杖を大地に突き刺すようにしっかりと持ち立っている。彼女は、堂々とした風格のある戦士のように見える。背景にいる羊たちと、二列に配置された木々が、遠近法の消失点に向かっていく様子は、ヒロインの背の高さを強調している。杖と前景右手の木の幹が作る鋭角、そしてその木が若い女の頭上にアーチ状に広がりダイヤモンド形の枠の中にしっかりととらえて安定感のある構図を作っている。鑑賞者は彼女の広大な支配領域の一部を見て感じる。鑑賞者をじっと見つめる眼は独立心と自己主張の強さ、支配者の雰囲気をも漂わせているようだ。

スタートの農場労働者表象に近いものとしてクラウゼンの絵画を眺めた。死を迎えた犁をひく老人、老女の肖像画、孤高の女羊飼いといった人物たちは、ある農業の仕事に従事する者の典型であり、全体として民衆(フォーク)を構成していると言える。

## 結 語

19世紀イギリス帝国が繁栄を謳歌していた時代、イングリッシュネスはブリティッシュネスの陰に隠れて目立たなかった。しかし1870年代、帝国主義の拡大とともに国際情勢が変化、国内外でナショナリズムが台頭し、ブリティッシュネスの根幹にあったプロテスタンティズムも揺らぎ始めた。特に世紀末、帝国への自信を喪失し、ケルト文化復興の動きが出始めると、対抗してアングロ・サクソン主義を掲げたイングリッシュネスが登場した。それはイングランドの田舎というホームを支えている思想で、ハーディのウェセックスに見られるようにイングランド南部の田舎とつながっていた。

ジョージ・スタートは、イングランドの伝統的な農村で生まれ育った農業労働者、ベッツワースの姿を通し、個人を描いて同時に民衆(フォーク)を描いた。ラ・サンクやクラウゼンの描く農村風景は農民一人一人に焦点を当てているが、これもフォークの典型を描いたのであろう。コテッジ・ホームに住む農業労働者の個性は生存のための闘いである仕事を通じて強く感じられる。しかし個人でありながら民衆の典型でもある、アングロ・サクソン主義に裏打ちされたイングリッシュネスへと農業労働者は変

貌を遂げつつあるのではなかろうか。

#### 引用・参考文献リスト

〈英語文献〉

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Verso, 1991.
- Baucom, Ian. *Out of Place: Englishness, Empire, and the Locations of Identity*. Princeton UP, 1999.
- Bourne, George. *Memoirs of a Surrey Labourer: A Record of the Last Years of Frederick Bettesworth*. 1907. Leopold Classic Library, n. d.
- . *Lucy Bettesworth*. 1913. Cambridge UP, 2010.
- Burke, Edmund. *Reflections on the Revolution in France*. 1790. Oxford UP, 1993.
- Colls, Robert. *Identity of England*. OUP, 2002.
- Colls, Robert, and Philip Dodd, editors. *Englishness and Culture 1880–1920*. 1986. Revised ed. Bloomsbury, 2014.
- Davidoff, Leonore, and Katherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780–1850*. Revised ed. Routledge, 2002.
- Fraser, John. “Sturt and Class: The Bettesworth Book.” *English Studies in Africa*, vol. 10, 2, 1967, pp. 129–146.
- Freeman, Mark. “The Agricultural Labourer and the ‘Hodge’ Stereotype, c. 1850–1914.” *The Agricultural History Review*, vol. 49, no. 2, 2001, pp. 172–86.
- Gellner, Ernest. *Nations and Nationalism*. Cornell UP, 2008.
- Gervais, David. *Literary Englands: Versions of ‘Englishness’ in Modern Writing*. Cambridge UP, 1993.
- Hoskins, W. G. *The Making of the English Landscape*. 1955. Penguin Books, 1985.
- Jenkins, Adrian. *Painters and Peasants: Henry La Thangue and British Rural Naturalism 1880–1905*. Bolton Museum and Art Gallery, 2000.
- Kumar, Krishan. *The Making of English National Identity*. Cambridge UP, 2003.
- Langford, Peter. *Englishness Identified: Manners and Character 1650–1850*. Oxford UP, 2001.
- Leavis, F. R., and Denys Thompson. *Culture and Environment: the Training of Critical Awareness*. Chatto & Windus, 1959.
- Macaulay, Thomas Babington. *Speeches by Lord Macaulay: with his Minute on Indian Education*. Oxford UP, 1935.
- Mandler, Peter. *The English National Character: The History of an Idea from Edmund Burke to Tony Blair*. Yale UP, 2006.
- McConkey, Kenneth. “George Clausen.” *Grove Art Online*. doi: org.lonlib.idm.oclc.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T018054. Accessed 1 April 2021.
- McConkey, Kenneth. “Henry Herbert La Thangue.” *Grove Art Online*. doi: org.lonlib.



- idm.oclc.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T049505. Accessed 1 April 2021.
- Pevsner, Nikolaus. *The Englishness of English Art*. 1956. Penguin Books, 1964.
- Pocius, GERAL L. “George Sturt and His Village : Toward Alternative Views of English Folkloristics”. *Folklore Studies in Honour of Herbert Halpert : A Festschrift*. Edited by Kenneth S. Goldstein and Neil V. Rosenbeg. Memorial University of Newfoundland, 1980, pp. 283–301.
- Powell, David. *Nationhood & Identity : the British State Since 1800*. I. B. Tauris, 2002.
- Quiller-Couch, Sir Arthur. “Patriotism in English Literature I.” *Studies in Literature First Series*. 1918. Cambridge UP, 2008, pp. 273–288.
- Reviron-Piegay, Floriane editor. *Englishness Revisited*. Cambridge Scholars, 2009.
- Ruskin, John. “Of Queen’s Gardens” in *Sesame and Lilies* (1865) from *John Ruskin : Selected Writings*, edited by Dinah Birch. Oxford UP, 2004, pp. 154–74.
- Rubinstein, W. D. *Capitalism Culture & Decline in Britain : 1750–1990*. Routledge, 1994.
- Samuel, Raphael, editor. *Patriotism : the Making and Unmaking of British National Identity*. 3 vols. 1989. Routledge, 2017.
- Smith, Anthony D. *National Identity*. U of Nevada P, 1993.
- “Sturt, George [pseud. George Bourne].” *Oxford Dictionary of National Biography*. doi-org.lonlib.idm.oclc.org/10.1093/ref : odnb/36366. Accessed 1 April 2021.
- Sturt, George. *The Bettesworth Book : Talks with a Surrey Peasant*. 1901. Cambridge UP, 2009.
- . *A Change in the Village*. 1912. Caliban, 1984.
- Ward, Paul. *Britishness since 1870*. Routledge, 2004.
- Wiener, Martin. *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850–1980*. Second ed. Cambridge UP, 2004.
- Young, Robert. *The Idea of English Ethnicity*. Blackwell, 2008.

〈邦語文献〉

- 井野瀬久美恵『大英帝国という経験』（講談社学術文庫，2017年）
- 大石和欣『家のイングランド 変貌する社会と建築物の詩学』（名古屋大学出版会，2019年）
- 川本静子／松村昌家編著『ヴィクトリア女王 ジェンダー・王権・表象』（ミネルヴァ書房，2006年）
- 塩川伸明『民族とナショナリズム—ナショナリズムという難問』（岩波新書，2008年）
- 富山太佳夫「田舎では農民が——イギリスの農村文学——」『文化と精読 新しい文学入門』pp. 309–42. (名古屋大学出版会，2003年)
- レヴァイン，フィリップ，『イギリス帝国史 移民・ジェンダー・植民地のまなざしから』並河葉子他訳（昭和堂，2021年）

〈図版出典〉

- Clausen, George. *An Old Woman*. 1887. <https://commons.wikimedia.org/wiki/Catego>

- ry : George\_Clausen#/media/File : George\_Clausen\_-\_Old\_Woman. jpg. Accessed Aug 22 2021. In public domain.
- . *Head of Peasant Woman*. 1882. [https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:George\\_Clausen#/media/File:George\\_Clausen\\_-\\_Head\\_of\\_a\\_Peasant.jpeg](https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:George_Clausen#/media/File:George_Clausen_-_Head_of_a_Peasant.jpeg). Accessed 22 August 2021. In public domain.
- . *The Shepherdess*. <https://artuk.org/discover/artworks/the-shepherdess-98822> © Walker Art Gallery. Accessed Aug 22 2021. Under Creative Commons License.
- La Thangue, Henry. *The Last Furrow*. 1895. <https://www.wikiart.org/en/henry-herbert-la-thangue/the-last-furro-1895>. Accessed 22 August 2021. In public domain.